

総合的学習の教育効果に関する追跡調査

—— 鳴門教育大学附属中学校「未来総合科」卒業生及び元教員に対する面接調査を中心に ——

村川 雅弘*, 鎌田 明美**

(キーワード：総合的学習，未来総合科，総合的な学習の時間，教育効果，追跡調査)

I. 総合的な学習の時間の変遷

1. 平成10年学習指導要領改訂及び平成15年学習指導要領一部改正と総合的な学習の時間の創設

総合的な学習の時間は、ゆとりの中で「生きる力」を育むとの方向性を示した中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」（第一次答申：平成8年7月）の提言を受け、平成10年の学習指導要領改訂において小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校に創設された。この改訂の基本方針は、「①豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」「②自ら学び、自ら考える力を育成すること」「③ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎・基本の確実な定着を図り、個性を生かす教育を充実すること」「④各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること」の4つである。②では総合的な学習の時間を含む各教科で体験的な活動の充実を図ることを求め、④では主に総合的な学習の時間が創意工夫を生かした教育課程編成の要であることを示している。また、教育課程審議会（答申：平成10年7月）の中では、この時間のねらいとして「各学校の創意工夫を生かした横断的・総合的な学習や児童生徒の興味・関心に基づく学習などを通じて、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることである。また、情報の集め方、調べ方、まとめ方、報告や発表の仕方などの学び方やものの考え方を身に付けること、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育てること、自己の生き方についての自覚を深めることも大きなねらいの一つとしてあげられよう。これらを通じて、各教科等それぞれで身に付けられた知識や技能などが相互に関連付けられ、深められ児童生徒の中で総合的に働くようになるものとする」と掲げている。総合的な学習の時間と教科学習とが相互に関連付けられることの重要性を明示している。

平成10年12月に告示された学習指導要領において、ねらいの中で教科等との関連の必要性は掲げられなかった。総合的な学習の時間は、各校が創意工夫を行う時間であることから、各教科等のように目標や内容を示さず、総則の中でねらいや配慮事項をおおよそ1頁で示すこととなる。平成11年5月作成の総則編解説書では約14頁の扱いとなっている。筆者（村川）も解説書作成者の一人として、「創設されたばかりの時間であり、教科書が存在しないだけに、もっと詳細に解説すべきであること、学校名を伏せても具体的な事例を載せること」及び「答申にあったねらいの一つである教科等との関連を明示すべきこと」を主張した。しかし、この時間が各学校の子どもや地域の実態を踏まえて独自に開発することを重視するという趣旨から詳細かつ具体的な記述は見送られ、かつ教科等との関連については配慮事項に盛り込むこととなった。

平成15年学習指導要領の一部改正に伴って作成された平成16年の総則編解説書（一部補訂）では、総合的な学習の時間の一層の充実を図るために、約22頁の扱いとなっている。例えば、「各教科や道徳、特別活動で身に付けた知識や技能等を関連付け学習や生活に生かし総合的に働くようにすることがこの時間のねらいである」と明示し、改めてねらいとして掲げられている。また、「各学校において目標及び内容を定めること」「この時間の全体計画を作成する必要があること」「教師が適切な指導を行うとともに学校内外の教育資源の積極的な活用を工夫する必要があること」を明確に位置付けている。

2. 平成20年学習指導要領改訂と総合的な学習の時間の充実

平成20年1月の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改

*鳴門教育大学教職実践力高度化コース

**徳島県立富岡東中・高等学校

善について」(答申—以後, 答申)では平成10年学習指導要領実施状況下の課題として「基礎的・基本的な知識・技能の習得とこれらを活用する思考力・判断力・表現力を相互に関連させながら伸ばしていくことの理解の共有が不十分」「自ら学び考える力を育成するという理念が誤解され, 教師が指導を躊躇する状況を生んでいる」「各教科と総合的な学習の時間との適切な役割分担と連携が必ずしも十分に図られていない」「基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに, 観察・実験やレポートの作成, 論述といった知識・技能を活用する学習活動を行うための必修教科の授業時数が十分でない」等が指摘され, 教科学習の時数確保の影響も受け, 今次学習指導要領改訂において総合的な学習の時間が, 小学校では中学年が105時数から70時数に, 高学年は110時数から70時数に, 中学校でも第1学年が50時数, 2・3学年が70時数に削減された。

この時数削減だけに着目すれば, 「総合的な学習の時間の軽視」と捉えられがちであるが, 本答申では, 学校教育法一部改正を受けて, 「基礎的・基本的な知識・技能」と「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」, 「学習意欲」を学力の重要な3要素として示した。つまり, 習得型の学力に加え, 平成10年学習指導要領の下で主に総合的な学習の時間が担ってきた活用型の学力を教育課程全体で重視しようとしている。総合的な学習の時間の考え方が教育課程全体に広げられたと解釈することができる。

また, 平成10年学習指導要領では総則の中で扱われていた「総合的な学習の時間」を章立てとし, その趣旨の周知徹底と取り組みの一層の充実を図ろうとしている。総合的な学習の時間に関しては学校間格差が存在している要因として, この時間の趣旨が十分に伝わっていないこと, 子どもや地域の実態や特性を踏まえた目標の設定や教材開発, 指導計画の作成, 家庭や地域との連携・協力など学校や教師による創意工夫が強く求められるにもかかわらず, そのための具体的な手だてが示されず, 学校や教師に対して, ある意味では「丸投げ」の形をとってきたことにある。そのため, 総合的な学習の時間において二極化を生み出してしまった。今次改訂では章立てを行ったことにより, 総合的な学習の時間の解説書が作成された。改めてこの時間の意義が語られるとともに, 子どもや地域の実態を踏まえた全体計画や年間指導計画の作成, 具体的な指導や評価の在り方, 校内における連携・協力体制の在り方, 家庭や地域との連携の仕方などが具体的に提示された。結果的には, 総合的な学習の時間の充実化の方向で改訂が行われた。

Ⅱ. 総合的な学習の時間と学力問題

1. 総合的な学習の時間と汎用的な資質・能力との関連

教育活動の前提は「子どもたちにどのような力を付けるのか」という目標の明確化と共有化である。それが曖昧だと学校教育は意図的・計画的に機能していかない。子どもにどのような力が付いたか, 子どもがどう変容したのかを明らかにするための評価にもかかわる。学力観は教育活動において極めて重要な目標と評価の明確化と共有化に大きな影響を与えている。

先にも述べたように, 今次改訂では一部教科(国語や理科, 算数・数学, 外国語など)の時数増加と総合的な学習の時間の時数削減等により, 文部科学省は基礎基本の徹底へと大きく舵を切ったように受け取られがちであるが, 「生きる力」の看板を下げたわけではない。答申の中で『改正教育基本法や学校教育法の一部改正は, 「生きる力」を支える「確かな学力」, 「豊かな心」, 「健やかな体」の調和を重視するとともに, 学力の重要な要素は, ①基礎的・基本的な知識・技能の習得, ②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等, ③学習意欲, であることを示した。そこで示された教育の基本理念は, 現行学習指導要領が重視している「生きる力」の育成にほかならない』と明示し, これらが今次改訂に反映されている。

今次改訂に影響を与えたのが, PISA 学力調査である。特に「読解力」に関する結果が, 初回の2000年に比べ2003年では8位から14位へ後退したことが大きな波紋を呼んだ。ちなみに「数学的リテラシー」は1位から6位, 「科学的リテラシー」は2位のままであった。PISA 学力調査の基盤となる学力観がキー・コンピテンシーで, 「人間力」もこのキー・コンピテンシーの枠組みを参考にしている。キー・コンピテンシーは以下の3つのカテゴリーからなる。①相互作用的に道具を用いる(「言語, シンボル, テキストを相互作用的に用いる能力」, 「知識や情報を相互作用的に用いる能力」, 「技術を相互作用的に用いる能力」)で, 様々な問題解決を図る際に, 関連しそうな知識や技能, 経験をつなげ当てはめ, うまくいかなければ, 別の知識や技能, 経験を取り出すといった行為の繰り返しととらえることができる。PISAの「数学的リテラシー」や「科学的リテラシー」, 「読解力」はこのカテゴリーに含まれる。②「異質な集団で交流する」「他人とよい関係を作る能力」, 「協力する能力」, 「争いを処理し, 解決する能力」である。「社会がいろいろな点でいっそう断片化し, 多様化するようになってきて

いる時に、個人間の人間関係をうまく管理することは、個人の利益からも新しい形の協力関係を作る上でもいっそう重要になってきている」とその必要性を述べている。③「自律的に活動する」（「大きな展望の中で活動する能力」、「人生計画や個人的プロジェクトを設計し実行する能力」、「自らの権利、利害、限界やニーズを表明する能力」である。何のために学ぶのか、学んだことによって社会においてどのような役割を果たしていくのかを考えることを重視している。また、自らの権利や利害、限界、要望を表明することも大切なことである。）。いずれも現代の子どもたちに身に付けたい力と捉えることができる。

このキー・コンピテンシーをはじめとして、資質・能力に関する提言が国内外で数多くなされている。村川（2014）は国内外での提言の一部をまとめている¹⁾。各学力観を通して共通点が多い。表現や位置づけ（上位項目か下位項目か）は異なるが次の5つ（下線）に整理できる。

まず、共通性が高いのは「問題解決力」と「対人関係形成力・協調性・コミュニケーション力」、「自律性・主体性」である。ほぼ全ての学力観に含まれる。先行き不透明な時代を生き抜く子どもたちに「様々な課題に対して主体的かつ協同的に既存の知識や技能を活用して問題解決を図っていく力」は必要不可欠と捉えている。義務教育段階以降を強く意識している「人間力」（社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な力）や「社会人基礎力」（組織や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力）、「学士力」（各専攻分野を通じて培う共通の力）、「基礎的・汎用的能力」（分野や職種にかかわらず、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる能力）などは「汎用性の高い基礎的・基本的な知識・技能」に加え「自己制御・ストレスコントロール力」などの必要性を提唱している。なお、「成人力」（職場や日常生活の中で必要となる総合的な力）は PISA 調査の成人版である。

今次改訂では、総合的な学習の時間において「育てようとする資質や能力及び態度」を学校として設定することを求めている。総合的な学習の時間の目標をより具体化したものである。解説書の中では、「学習方法に関すること」、「自分自身に関すること」、「他者や社会とのかかわりに関すること」の3つの視点を例示している。この3つの視点は、これまで総合的な学習を通して子どもたちが身に付けてきた力を整理したものである。そして、実はこの3つの視点と「キー・コンピテンシー」の3つのカテゴリーが順序は異なるが一致する。現在、世界の国々はこの「キー・コンピテンシー」や「21世紀スキル」といった汎用的な資質・能力の育成のための教育改革を推進しているが、実は我が国は10年以上前から「キー・コンピテンシー」を育成するカリキュラムを全ての小・中・高等学校及び特別支援学校に「総合的な学習の時間」という形で導入した「先進国」ということができる。

2. 総合的な学習と教科学力との関連

総合的な学習の時間はキー・コンピテンシー等のいわゆる汎用的な資質・能力にかかわっているだけではない。近年、総合的な学習の時間と教科学力との関連が数多く指摘されるようになった。そのきっかけの一つは、平成25年度全国学力・学習状況調査の分析結果である（文部科学省、2013）。小学校6年生では、総合的な学習の時間に「自分で課題を立てて、情報を集めて整理して、調べたことを発表するようにしている」児童ほど国語も算数も学力が高く、特に、応用力を測る B 問題に顕著な差が表れている²⁾。中学校3年生もほぼ同様の傾向が報告されている³⁾。実際、総合的な学習の時間の充実により、教科学力の向上を果たした学校は少なくない。

例えば、広島県 A 小学校は平成21年度当時、表現力やコミュニケーション、価値判断力、自己効力感において課題を抱えていた。当時の校長の「体験を充実させ、やりきった感を味わわせ、自分に自信を持たせたい」の考えの下で、生活科と総合的な学習の研究を継続的に進めた。その結果、平成25年7月の3年生以上の児童に対する調査においては「課題解決に取り組むこと」や「工夫して伝えること」、「地域の人とかかわること」に関していずれも95%以上の児童が「できている」と回答し、コミュニケーション力等に改善が見られる。また、学力調査の経年比較においても、顕著な伸びが見られる。広島県の「基礎・基本」定着状況調査結果を見ると、生活科と総合的な学習の研究校であるにもかかわらず、国語及び算数の学力が年々向上し、25年度の国語では県平均を8.8ポイント、算数は11.2ポイント上回っている。その要因の一つは、総合的な学習の時間の全体計画及び年間指導計画において教科等との関連を明確にし、日々の授業でも意識していることである。24年度調査では「国語が他の教科や生活に役立つ」と回答している児童が95%、「算数が他の教科や生活に役立つ」と回答している児童が100%となっており、総合的な学習を中心とした教科等との関連的な指導が教科間の関連にも好影響を及ぼしていると考えられる⁴⁾。

近年、PISA 調査においても総合的な学習の時間が注目されている。例えば、長期にわたり読売新聞で「教育ルネッサンス」のデスクを務めた中西茂は「総合」は、OECD も注目している。4月に公表された2012年 PISA の問題解決能力調査で、日本はシンガポール、韓国に次ぐ3位（OECD 加盟国では1位）の好成績だった。（中

略) この調査の報告書で、OECDは、問題解決能力を身につけるための時間として、日本の「総合」を評価しているのである。(中略) そろそろ、「脱ゆとり」の先を見据えるべきだろう。「ゆとり」か「知識」かの二項対立から脱したい。「総合」は、長い目で見た成果に注目すべきではないだろうか。」と指摘している⁵⁾。また、朝日新聞は平成26年8月27日の社説で「総合学習は、たとえば地理と化学で学んだことを使って環境問題を考えるような、教科横断型の学習だ。今の学習指導要領では学力低下批判をうけて主要教科の時間を増やすため、かわりに授業時間数を削られた。批判の一因はPISAでの日本の順位低下だった。しかし、PISAは本来、教科横断型の学力を理想とするテストだ。文部科学省の中央教育審議会での大学入試改革論議も、同じ方向を向いている。それは、知識よりも実社会で使える学力が世界的に求められているからだ。これからはむしろ総合学習のような学びが重みを増すに違いない。」と述べ⁶⁾、毎日新聞も平成26年8月26日の社説で「学力テスト結果からは、総合学習で問題探究の過程を重視した学習指導の効果がうかがえる。多様な「グローバル時代」の新しい学力のあり方を考える上で、たしかなヒントになるだろう。より詳しい調査と工夫の共有を求めたい。」とほぼ同一の論調である⁷⁾。創設から10年あまりを経て、総合的な学習の時間の意義や効果がようやく理解されつつある。

Ⅲ. 総合的な学習で育まれる学力調査

1. 総合的な学習の時間で育まれる学力に関する調査

総合的な学習の時間は平成10年の学習指導要領改訂により小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の教育課程に位置付けられた時間の名称である。我が国においては、それ以前にも教科の枠にとらわれない、児童生徒の生活や興味関心から課題を設定したり教科横断的な現代的課題を取り上げたりして取り組む学習が国公私立の附属学校や一部の公立学校、文部省・文部科学省の研究開発学校を中心に展開されてきた。村川(1987)は、カリキュラムを学習指導要領への準拠の程度及び学習者にとっての共通性の視点から、「教科カリキュラム」(共通性から「教科別指導型」「個別指導型」「教科内選択型」「教科間選択型」の4つ)、「教科関連型カリキュラム」, 「教科統合型カリキュラム」, 「経験型カリキュラム」, 「学際型カリキュラム」の大きく5タイプに分け、その中の「教科関連型カリキュラム」, 「教科統合型カリキュラム」, 「経験型カリキュラム」, 「学際型カリキュラム」を広義の総合的な学習ととらえている⁸⁾。

これまで総合的な学習の時間に先立ち先行的に実施された学校において、この学習を通して育まれた学力に関する調査は少なからず実施されてきた。いわゆるペーパーテストで測れない資質・能力であるために、主として、児童生徒や教師、保護者を対象とした質問紙調査が主流である。

ここでは、学校評価やカリキュラム評価を目的とした学校単位による調査ではなく、全国的な調査をいくつか取り上げる。

赤澤(2001)は、平成12年に総合的な学習に2年以上取り組んでいる小学校(先進校)8校(6年生556名, 教師117名, 保護者493名)と1年未満の小学校(初発校)6校(6年生386名, 教師59名, 保護者337名)とを比較した⁹⁾。4肢選択で、「そう思う」を4, 「どちらかといえばそう思う」を3, 「どちらかといえばそう思わない」を2, 「そう思わない」を1とし、平均の差の検定(t検定)を行っている。児童調査では次のような結果を得ている。①「ものの考え方・学び方」に関しては、「TVニュースや新聞の記事を見たり読んだりしている」や「考えを表す時、文章やイラストなど自分なりに工夫することができる」など13項目中8項目において危険率1%未満の有意差がある。②「生きる力」に関しては、「障害者(筆者注-当時の表記をそのまま使用)や老人問題(筆者注-前者と同様)について関心がある」や「環境問題に関心がある」など14項目中8項目において危険率1%未満の有意差がある。③「自己の生き方」に関しては、「友だちとの協力は大切である」や「友だちは大切だと思う」, 「みんなと反対の意見でもはっきり言うことができる」など10項目中8項目に危険率1%未満の有意差がある。教師調査では「子どもの学習面と生活面」に関しては、「文章やイラストで考えを表す時、自分なりに工夫している」や「年齢に応じたマナーやエチケットが身に付いている」など15項目中13項目において危険率1%未満の有意差がある。保護者調査では「子どもの学習面と生活面」に関しては、「学習には進んで取り組んでいる」や「自分なりに考える姿が見られる」など20項目中6項目において危険率1%未満の有意差がある。

ベネッセ教育総研(2002)は、平成13年に小学校(19校, 5年生1618名, 教師84名, 校長19名)及び中学校(15校, 2年生2313名, 教師134名, 校長13名)に「新しい学力を育む調査」を実施した¹⁰⁾。先進的実践校(3年以上の実績, 平成13年度に50時間以上実施, 過去5年間に総合的な学習に関する研究指定の3条件の内の2つに該当)と一般校を比較している。小学校5年生による「生きる力」に関する自己評価では、5肢選択で「とてもそ

う思う」と「ややそう思う」の合計が5割を超えた上で約10ポイント程度の差が見られた項目は、「健康を守るためにどうしなければならないか知っている」「最近の社会のできごとについて、家族や友だちと話し合ったことがある」「外国の文化や人々の暮らしについて調べてみたことがある」「環境のことを考えて、物をむだづかいせず大切に使用している」といった社会的な課題に関する興味関心や具体的取り組みと「友だち一人ひとりのよいところを探そうとしている」という人権意識である。中学校2年生では、「とてもそう思う」と「ややそう思う」の合計で5割を超えた上で約10ポイント以上の差が見られた項目は、「自分の苦手なことにもチャレンジしようとしている」「ものごとを、すじみちを立てて考えることができる」といった汎用的な資質・能力、「インターネットで目的に応じた情報を集めることができる」「自分がやりたいことによって、コンピュータやビデオ、本、カメラなどのそれぞれの良さをいかして使い分けることができる」といったICT活用力、「自分が住んでいる地域の自然、くらしや歴史などの特長について知っている」「外国の文化や人々の暮らしについて調べてみたことがある」といった社会的な課題に関する興味関心や具体的取り組みなど8項目であった。

村川(2002)は、平成14年に全国の総合的な学習先進校(3年以上の実績のある小学校70校)に調査を行った¹¹⁾。その結果、5肢選択で(総合的な学習の実施後に)「強まった」「やや強まった」と回答した割合が90%を超えた項目は、心理・行動面では「学校生活が楽しそう」「子ども同士協力しあう様子が見られる」「何事に対しても前向きに取り組めるようになった」「自分の考えや行動に自信がみられるようになった」「子ども同士互いの良さを認め合うようになった」の5項目、学習面では「コンピュータ等の情報機器を使いこなす技能が身に付いた」「必要な資料を自分で探せるようになった」「作品や表現方法に自分なりの工夫が見られるようになった」「自分の考えをはっきりと言えるようになった」「電話のかけ方やインタビューの仕方が向上した」「見通しを持って学習を進められるようになった」など8項目である。

3つの調査結果から共通に見られる効果として、児童・生徒調査や教師調査から、様々な社会問題に対する興味・関心、インターネットや電話などによる情報収集力、コラボレーション力や協力性などの汎用的な資質・能力が育っている。

3. 卒業した児童生徒に対する追跡調査

総合的な学習で育てようとしている資質・能力は、むしろ将来において発揮される類のものである。卒業生に対して実施した調査をとりあげる。卒業生に対する質問紙調査または面接調査が主流である。

滋賀大学附属中学校(2006)は、1983年度より総合学習「びわこ学習」(その後、「BIWAKO TIME」等に名称が変わる)に取り組んだ総合的な学習の先進校である¹²⁾。2005年に卒業生400人に対して無作為抽出で追跡調査を行った(有効回答59人)。その結果、約90%の卒業生が「びわこ学習」が役立ったと回答している。主課題であった環境への関心が最も多かったが、それ以外に表現力やメディア活用力、人間関係力を挙げている。

佐野(2001)は、1970年代後半より総合的な学習に取り組んできた小学校の卒業生に対する面接調査を通して、「他の人の活動からの刺激や触発」「経験の繰り返しによる自己発見」「人との関わりによって得る充実感」「認められることによる達成感」を抽出している¹³⁾。

五十嵐(2008)は、小学校2校(計11名)、中学校1校(2名)、高等学校1校(3名)の卒業生及びその当時の担任各1名に対してグループ・インタビューを行った¹⁴⁾。卒業生の語りを3つの視点から分析している。一つは「自己に関すること」である。「総合的な学習を通して得られた自信と自分自身に対する理解が、その後の学習意欲や自らものごとに取り組む姿勢、卒業後の生き方や職業選択につながった」とまとめることができる。一つは「他者との関わりに関すること」である。「総合的な学習での多様な人との出会いやかかわりによりコミュニケーション力や自分の考えを他者に伝える表現力がその後生かされている」とまとめることができる。一つは「達成感という経験の共有」である。「総合的な学習において他者との協同によって味わった達成感が、自分に対する自信の高まりを促し、そのことによりその後の人生における困難を乗り越える力や学習意欲につながった」とまとめることができる。

IV. 研究の目的

鳴門教育大学学校教育学部附属中学校(以後、附属中)は平成6年度より4年間、文部省(当時)の研究開発学校指定校として、研究課題「新しい時代に生きる力を育成する新教科の創造－『未来総合科』の創造と学習活動の展開－」に取り組んだ¹⁵⁾。「未来総合科」は新教科として開発されたが、前述の村川(1987)による総合的学習の分類では「学際型カリキュラム」に位置づけることができる。その当時のカリキュラムの目標・枠組みは、

その後も附属中において総合的な学習の時間に継承されている。

研究開発時の生徒は卒業後20年近くを経て、社会において各々仕事に従事している。これまで、総合的な学習を経験した児童生徒に対する調査は行われているが、その裏付けとしての教師に対する調査を行った研究事例はない。本研究では、「未来総合科」におけるカリキュラムや具体的な指導が元生徒のその後の人生や仕事にどう生かされているのか。当時の生徒及び教師に対する面接調査により明らかにする。

V. 附属中学校卒業生及び元教員に対する追跡調査

1. 調査の目的

総合的な学習の時間が育成すべき将来に生きる資質・能力及びカリキュラムや指導の在り方との関連を明らかにするために、未来総合科を学習した附属中の卒業生9名の証言をもとに、元教員5名の証言や関連資料の整理分析を行った。当時の新教科としてのねらい、構想、カリキュラム、指導方法、学習内容などとの関連について、次の4つの観点を踏まえて調査研究を進めた。

- ①どのような体験からどういう資質・能力が育てられたのか。
- ②どのようにして育てられたのか。
- ③身に付いた資質・能力が卒業後どのように生きて働いたのか。
- ④資質能力を育む上で、実効性の高いカリキュラムとはどのようなものか。

調査対象（卒業生）	
卒業生 A	企業 社長
卒業生 B	企業 社員
卒業生 C	企業 中間管理職
卒業生 D	内科医師
卒業生 E	情報紙編集者
卒業生 F	内科医師
卒業生 G	大学研究者
卒業生 H	県庁職員
卒業生 I	保育士

2. 調査の方法

(1)方法 1

平成6年度から8年度に附属中において、未来総合科を3年間学習した生徒が卒業してからの18年間の人生を振り返り、未来総合科の学びが生きて働いた具体的な場面を想起して、語ってもらった。次に示す項目を事前に設定し、半構造化インタビューを行い、発話プロトコルを整理分析した。

1. 未来総合科を覚えていますか。
2. 未来総合科の授業で印象深かったことを話してください。
3. 未来総合科の授業が面白いと感じるところはどのようなところですか。
4. 未来総合科の授業でグループ学習のよさはどのようなところにありますか。
5. 未来総合科の授業でどのような意識や力が付きましたか。
6. 未来総合科の授業での学びで大学や社会で役立ったことはどんなことでしたか。
7. 未来総合科の授業は人生のどの節目でどう役立ちましたか。
8. 今後、この学びを広げていくためにどうすればよいと思いますか。
9. 未来総合科の授業を受けていなかったら、自分はどうかだったと思いますか。
10. 親として子どもを入学させる学校は未来総合科のような学習を重視しているところですか。理由は何ですか。

(2)方法 2

平成6年度から8年度、未来総合科を研究開発していた時期に勤務していた元附属中教員に未来総合科を指導した当時のことを振り返り、語ってもらった。次に示す項目を事前に設定し、半構造化インタビューを行い、発話プロトコルを整理分析した。

対象対象（元教員）

元教員 J	元附属中学校長	元附属中教員
元教員 K	県教育センター管理職	元附属中教員
元教員 L	中学校長	元附属中教員
元教員 Z	中学校指導教諭	元附属中教員
元教員 X	中学校教諭	元附属中教員

3. 調査の結果と考察

1. 未来総合科の授業づくりで印象深かったことを話してください。
2. 未来総合科の授業をしていて面白いと感じたところはどのようなところですか。
3. 未来総合科の授業でグループ学習のよさはどのようなところにありますか。
4. 未来総合科の授業でどのような意識や力が生徒に付いたと思いますか。
5. 生徒は、未来総合科の授業で学んだことで大学や社会で役立ったというのですが、先生方の指導の中での学習活動や学習内容はどのように関連したと思いますか。
6. 未来総合科の授業は人生の節目で役立ったということですが、そのことについてはどう考えますか。未来総合科の指導経験を異動先の学校等で生かすことができましたか。
7. 未来総合科のような学びを広げていくためには、どうすればよいと思いますか。
8. 汎用的能力が今後重視されますが、それと未来総合科との関連はどう思いますか。
9. 子どもや孫を入学させる学校は未来総合科のような学習を重視しているところですか。また、理由は何ですか。

卒業生の証言をもとにして未来総合科で身に付けた力をカテゴリー分けした。二重線枠囲みは卒業生の証言、枠囲みの中の(S○○○)は卒業生の証言を表す通し番号である。なお、同じ番号の卒業生の証言が複数のカテゴリーにかかわることがある。

また、筆者の村川は未来総合科の研究開発委員を務め、鎌田は附属中の教員として研究開発メンバーであった。したがって、本研究調査の整理分析や考察に、開発当時の附属中の生徒や教員の様子、カリキュラム構想から学習活動状況などを振り返って記述している場合がある。

以下、18年経って分析したときの未来総合科のカリキュラム評価とともに、汎用的な資質・能力との関連を探る。「問題解決力」と「対人関係形成力・協調性・コミュニケーション力」、「自律性・主体性」、「様々な社会問題への興味・関心、社会とのつながり」、「職業意識」のカテゴリーに焦点化しながら、卒業生と元教員の証言をもとに指導の背景を見出し、未来総合科の教育効果と課題について明らかにしていきたい。

Ⅵ. 鳴門教育大学学校教育学部附属中学校「未来総合科」のカリキュラム

1. 未来総合科の教科目標とカリキュラム構成

「未来総合科」のカリキュラムの概要について触れておきたい。未来総合科のねらいは「①生活および社会に関わる問題を総合的にみる能力の育成を重視する」「②未来を構想する中で、自己に関わる課題を解決し、自らの意思を決定していく能力の育成を重視する」「③体験や調査的活動を通して、自ら学習していく能力や態度の育成を図る」の3つである。①では総合的なつながりを意識しながら生活や社会問題を捉え、②では未来の社会づくり構想で自己決定する力を育成し、③では学習活動を通して自ら学ぶ関心意欲態度を育成することを示している。その教科目標として「体験や調査的活動を通して、現代および未来社会において解決の迫られている諸問題を総合的にとらえ、未来を構想する中で、自らの意思を決定していく能力の育成を図り、その過程において、自ら学習していく能力や態度の育成を図る」を掲げた。この目標の実現のためのカリキュラム構成に特徴がある。表1に示すように年間計画は大きく、「基礎学習(グランドワーク:略称G)」、「領域別学習(ケーススタディ:略称C)」、「領域総合学習(アドバンススタディ:略称A)」の3つの区分からなっている。「基礎学習」は各学年の年度始めに設定され、学習観の転換と基礎的な学習スキルの習得をねらいとしている。「領域別学習」は、新たな学習スキルを活用しながら国際化・情報化・環境・社会福祉についての課題把握や基本概念の習得をねらいとしている。生徒は4領域をローテーションで学習する。

卒業生A(S020)は4領域の学びが将来の職業選びや社会貢献へと関わる態度の育成につながっていることを示唆している。

S020: …身近な環境や福祉の学習を未来総合科のような学習でしていくことで、将来においてやりたい、もっとやりたいという仕事につながっていくと思う。…(卒業生A)

「領域総合学習」は4領域にとらわれることなく、総合的な見方や考え方ができる課題を設定し、既存の教科学習や基礎学習、領域別学習で習得した知識やスキルを生かして、解決していくことをねらいとしている。

この総合的な見方考え方ができる課題を設定したことについて、卒業生F(S025)は現代社会の問題に多角的に迫った思い出を語り、社会生活を送る何かのきっかけ作りにつながる効果を話した。卒業生G(S027)は中学時代に社会問題や政治に触れ、考えを構築することがよりよい人生を歩みだすエネルギーになることを述べた。

S025: …授業内容を覚えていなくても、現代社会が抱えている社会問題をいろんな角度からアプローチして学んだことを思い出す。これまで、関連することに社会の中で出くわしたときに記憶が甦って、フラッシュバックするようなものがある。そこから中学時代に学んだことを思い出して、何かが広がるきっかけになることがある。いろんなものをちょっとでもかじっておくというのは、すごく大きいと実感する。(卒業生F)
S027: …中学生のときに社会問題や政治に触れることができ、自分ならこうすると考えられたのは意味があった。(卒業生G)

平成7年度は「私たちは阪神大震災から何を学ぶのか～震災に強い街づくりを提案しよう～」、平成8・9年度は「徳島の未来について考えよう～徳島独立計画～」に取り組んだ。「徳島独立計画」を課題にした理由とし

「21世紀の日本は、決して明るい展望ばかりではない。今のままで進むなら、2020年から2030年にかけて、様々な矛盾が一気に吹き出すとさえ言われている。～中略～自分たちの未来は自分たちの手で切り拓かなければならない。～中略～近未来の徳島を生徒たちの手でデザインさせたいと考えた」と述べている。これについての卒業生の語りを見ると、卒業生 A (S044) は未来志向型の学習効果を語っている。18年前の研究や考察であるにもかかわらず、そのいくつかの提案や予測が現代社会で実現していることに驚いている。卒業生 E (S082) も領域総合学習でまとめたレポートを見て、すでに18年前に現代社会の施策を考え時代の先取りをしていたことを指摘した。卒業生 H (S093) は自らの考えでよいかどうか体験活動で確かめ、しっかりと考えを構築し社会とつながった学びのよさを伝えた。

S044：…（自分たちがまとめたレポート集を見て）中学生がまさに時代を先読みしている。中学時代の社会問題を突いて今まさに重要な問題になってきているところをレポートに書いている。（卒業生 A）
 S082：…商工委員会で考えたことを思い出す。商工委員会政策で原発とか電気自動車を普及させる。ガソリン車の増税、電気車の減税を行う。これって今社会が取り上げてきていることですよ。間違いなく時代を先取りしている。意外ときちんと考えていたことがわかる。一生懸命考えたことが懐かしい…（卒業生 E）
 S093：…未来総合科は自分から考えることをしっかりして、その考えを実社会で体験できることが素晴らしいと思う。自分が考えたことで社会とつながれることがやっぱりよかったと思っている。（卒業生 H）

3年の「領域総合学習」は未来総合科の特徴を最も表している。まず、「領域総合学習2」のプレ研究「徳島の未来について考えよう～徳島の現状と未来～」（12時間）では文献研究やフィールドワークを通して徳島の現状を知る。それに続く「領域総合学習3」の本研究「徳島独立計画」（平成8年度：全26時間）においては、4つの学級が各々4つの政党に分かれて政策論争をする。まず、「徳島独立計画」の概要説明を受け（1時間目）、政党である学級ごとに重点政策とそれを反映した政党名を決定する（2・3時間目）。各学級の生徒が「農林水産委員会」「社会福祉委員会」「文教委員会」等6つの各種委員会に分かれ、委員

表1 未来総合科の年間計画

学年	学習区分	単元名	ねらい
第1学年	基礎学習1	価値観が対立した問題	未来総合科の学習イメージの形成
		国際化	私からのメッセージ
		情報化	情報機器を使いこなそう
		環境	もし吉野川がなくなったら
	社会福祉	バリアフリーのアイデア	
		基礎学習2	私たちから見た国際化
第2学年	基礎学習2	国際化	グローバルな視点
		情報化	情報の正しい伝達
		環境	吉野川と私たちの暮らし
		社会福祉	人にやさしい街づくり
	領域総合学習1	国際化	地球市民としての生き方
		情報化	未来を表現する
領域総合学習2	環境	水と私たちの生活	
	社会福祉	ボランティア体験をしよう	
	基礎学習3	アドバンストに向けて	
	領域総合学習3	徳島の未来について考えよう（本研究）	
第3学年	基礎学習3	国際化	グローバルな視点
		情報化	情報の活用
	領域総合学習3	環境	環境と私たちの生活
		社会福祉	人にやさしい街づくり

会内で基本政策を考え、分担を決定し、方針を考える（4～8時間目）。専門家の意見を聞き、個人政策を立案する（9～12時間目）。学級ごとに各種委員会内及び政党としての政策を協議し決定する（13～16時間目）。県議会での提案の準備を行い（17・18時間目）、県議会において徳島独立計画案を検討、完成させる（19～23時間目）。個人で構想や意見を小論文にまとめる（24～26時間目）。4学級が4政党に分かれて政策論争をするねらいとして、「現在及び未来社会において解決の迫られている諸問題に対して提言を行う中で、最も総合性が必要となるのは「政策」である」「一見矛盾するような問題に対しても対策を考えなければならず、総合的な構想力、判断力が求められる」としている。未来志向的な課題ではあるが、具体的な提言のためには徳島県や国が抱える問題や現状を把握する必要がある、主体的・意欲的に調査活動や協議が行われた。学習自体が今の職業と密接に結びついていることを語った卒業生 H (S008)。卒業生 A (S020) からは、4領域での学びが将来の職業選びへとつながることを示唆した発言があった。卒業生 F (S025) は4領域の学びが興味関心から社会貢献へつながり、自分とはどんなものか、どんなことに能力が発揮できるかという自分探しにつながったことを語っている。

S008：今、県庁で南部県民局の総合政策にかかわっているが、未来総合科で課題解決しようと取り組んだ徳島独立計画を実際の仕事の中で続けてしているというか、徳島独立計画を更新してきた。（卒業生 H）

S020：…身近な環境や福祉の学習を未来総合科のような学習でしていくことで、将来においてやりたい、もっとやりたいという仕事につながっていくと思う。…(卒業生 A)

S025：…みんなそれぞれ興味を持つ分野って違って、いいと思う。興味を持った分野を突き詰めていって何か職業につながったりすれば、学習の意味もある。もし、実際つながらなくても社会に出たとき、そこで自分が社会にできることって、何かを考えたりして意識が広がっていく。自分はどのようなものに興味を持つかに気付けるといふか、自分に気付けるといふ部分も未来総合科の大きな意義と思う。(卒業生 F)

2. 未来総合科の学習活動と指導方法

実際の学習活動はどうであったか。学習活動の特徴は、「(1)未来志向型の教科である」「(2)国際化・情報化・環境・社会福祉の問題について考える教科である」「(3)総合型の教科である」「(4)生活に役立つ教科である」「(5)体験や調査など主体的な活動を重視する教科である」「(6)表現活動を重視する教科である」の6つである¹⁶⁾。

(1)の授業では未来を予想したり、21世紀を場面設定したりしながら社会や学校の在り方、街づくりに提言や提案を行う。(2)の年間指導計画では未来総合科の学習は基礎学習、領域別学習、領域総合学習の3つに分かれ、その内の領域別学習は国際化・情報化・環境・社会福祉の4つの領域で構成され、それぞれの問題について考え、領域固有の観点や考え方を学ぶ学習を進める。(4)の教材では総合的なつながりを意識しながら生活や社会問題を捉え、(5)の学習指導方法では教師主導ではなく、体験や調査活動を通して自律的活動を展開し、(6)の授業ではディベートで議論することやレポートをまとめること、インターネットのHPづくりなどで表現活動を展開させることを示している。卒業生 F (S034) はプレゼン能力などコミュニケーション力が培われたと述べている。

S034：…同期生と比べると私とか(卒業生 D) 君はまとめや人に伝えることがしっかりテキパキできると医学部の先生は仰っていた。…振り返ってみると、プレゼン力とかディスカッション力とか未来総合科で経験を積み重ねてきたことで、自然と培われてきたことなのかなと思う。…(卒業生 F)

一方、指導方法はどうか。「指導組織」に「(1)教師は生徒とともに学んでいく」「(2)教師は学びのプロである」「(3)学級担任は生徒との結びつきが強い」と3つの理由で主に指導担当を学級担任に想定した¹⁷⁾。(1)で未来社会への問題を教師と生徒がともに学んでいくという姿勢こそが大切で、生徒よりも圧倒的な知識をもたなければ、教師は指導ができないといった従来の古い指導観を捨て、教師は生徒とともに学んでいく新しい指導観に立たなければならないことを示している。教師は、何よりもまず指導観の転換を図る必要があると考えたことによる。(2)は生涯学習の基礎となる自己学習力といった機能的な学力を身に付けることをねらっている。従来の教科のような知識・理解ではない。したがって、内容面における専門性は、さほど問題ではない。学びのプロである教師ならば、未来総合科の担当は可能と考え、学び方を教えることを伝えている。このように、生徒の自律性と主体性を育むことが予め示されていた。まさに、これまでの指導観を転換し、新たな指導方法を考えねばならない。一斉学習や知識獲得など習得型の授業形態から生徒が主体の自ら学ぶ探究型の授業形態を追究したことによる。

卒業生 C (S110) はチームで学び合うことで考え方の違いを出し合ったり、多面的に整理分析したりすることができるようになった。また、人と関わる力が身に付いたことも話した。

S110：…未来総合科が他教科と違うところは、従来型の学習をしても身に付かない学習形態を取り入れているところにある。組織で動き、かかわる力が付く。組織があって、それぞれ異なる役割があった。(卒業生 C)

次は、卒業生の自律的な活動力や主体的に学習に取り組む態度に関する証言である。例えば、卒業生 B (S002) と卒業生 C (S022) は、未来総合科は課題や答えを主体的に考えて見付けていく学習と捉え、従来の教科学習との違いを述べている。卒業生 F (S061) は未来総合科で身につけた主体的な学習態度を現在の職業における問題解決に活かしており、また、卒業生 C (S075) は自らが身に付けた主体的な解決力を職場の部下に求め、自らの力で課題解決力を養うことを目的に自律した部下を育てようとしている。

S002：それまでの授業というのは、先生主体で主に知識を覚える学習活動だった。…未来総合科は答えがなく、自分が課題を見付けていく。発想力とか創造力が養える。…(卒業生 B)

S022：…中学時代までの授業は、積み重ね型の学習活動だった。ゴールが未来総合科は与えられる。ゴールまでいろ

いろいろな方法を考えられる。生徒がどの過程をたどってゴールに到達するかが決められる。だから、それまでに体験した授業と違って面白い。自分たちが主体で考えながら進まないといけないので、大変だったけれど、やりがいがあると感じた。先生は傍らで助言しながら導いてくださった。(卒業生 C)

S061：…大人になって、自分の仕事とまったく違う分野のことを知りたいと思っても、敷居が高いとついやめようと思うようなところも、とりあえず電話かけてみたらいいか。とりあえず聞いてみようかというような意識が私にはある… (卒業生 F)

S075：…中間管理職という立場で問題が起き、こういう状況ですと部下から報告を受けたとき、こう解決したらよいと言わないようにしている。解決方法は部下自身の力で考えてもらうことにしている。(卒業生 C)

このような自律性と主体性が育った背景は、未来総合科の構想にある。例えば、元教員 L は未来総合科の学習は「今までの教科学習みたいに知識を生徒に渡す」教師主導でなく、教師は「後押し役ファシリテータ」と表している。また、元教員 J は、「教師主導ではない」が「生徒の主体的な学習を引き出す手だてを学習過程に仕掛けていた」と証言している。

また、「能力・資質のストラテジー」に「①多面的な見方の育成をめざして」「②総合的な見方・考え方の育成をめざして」の2つがある。①では「(a) ステレオタイプに気付かせ、そこから脱却させる」「(b) デイベートなどを導入し、肯定・否定の両側の立場からものごとをとらえさせる」「(c) 共通テーマのもとに課題を設定させる」「(d) 専門家をリソースパーソンとして活用させる」と4つの説明がある¹⁸⁾。

捉えておきたいことは、答えのない課題の解決において重要なことは、物事を多面的に見ることである。卒業生 F (S061) は未来総合科の中で「領域別学習」で諸課題の現状や実態を学び、「領域総合学習」で徳島が抱える問題を多様な分野から解決しようとしたことが、その後の人生に活かされていると考えられる。社会貢献しようとして問題解決しようとしたとき、そのことに関連する人と関わることの大切さを伝えている。より多くの人といろんな考えを分かち合うことで、よりよい方法を見出そうとしていることがわかる。人は一人では生きられない。支え合い、助け合い、協力し合うことで社会と関わりながらよりよく生きていける。未来総合科の学びのどのようところが、人が生きていく上で必要なことで、大切にしていかなければならないことが見えてくる。

S061：…医者として心においているのは、患者がどこに帰るかにあたって、その人が退院した後もその人にとってベストな生活が送られるところに帰ってあげたいと思って仕事をしている。ソーシャルワーカーや看護師の話合いにも関わって福祉や介護保険の部分にも参加して、社会の中で患者を診るという姿勢でいる。未来総合科の学びでわかったことだが、一分野だけで人間は生きられないことをいつも意識して医療にあたっている。(卒業生 F)

②では「(e) 学習過程の中に中間発表を位置づける」「(f) 再調査・再研究の場を設定する」「(g) 報告書や提案書として、グループや学級で学習したことをまとめさせる」と3つの説明がある。これで、指導方法が確立し、学びのスタイルが明らかになった。

次に、卒業生 A (S011) は学びで人と関わる時の協調性を身に付けたと話した。卒業生 B (S012) は人と関わり違う考えを出し合い課題解決することが実社会の中でも必要なことを語った。卒業生 D (S014) は人の命を預かる医者として、一人一人の患者の求める解へ近付ける必要性について考えてきた。卒業生 E (S015) は社会問題への興味関心が高まり自らの考えをまとめて表現する力が今の職業を支える力につながっていると語った。

S011：…領域総合はテーマが同じ人とグループで協調性をもって進めた。社会の中の問題をグループで考えて解決していくことが非常に有意義だった。社会問題だなんて、今まで考えてなかったことを考えて解決していくことが非常に有意義だったと思う。(卒業生 A)

S012：…一緒に学習活動をしていると、この人はこういう考え方があるんだと知ることできる。…みんなの意見を出し合い、正解はない中で、どう解決していけばよいか見つける。人と関わりあって、解決していくときに話し合ってきた。話し合う能力というのが社会の中でも重要なことだと思うので、普通の授業だけだと話し合う能力が養えない。未来総合科のような学習の中でより養うことができる。(卒業生 B)

S014：…課題解決するために、人と話し合うことを通して自分の意見が言えるようになってくる。医療に携わって、患者一人一人で正解が違うと思っている。医療には決まった答えがないので、権威のある先生が薦める治療法に対し、患者を診ている主治医が患者側に立った考えが述べられるかどうかで患者の運命は決まってくると思う。未来総合科で学んだ自分の考えを述べる力が役立っている。(卒業生 D)

S015：…未来総合科は答えがないことを考えていく中で、人と人が関わりながら課題解決をするためにやり取りを繰り返した。やり取りすることでコミュニケーション能力も養えた。情報を整理分析して、どのようにまとめて表現すると、聞いている人に伝わるかもよく考えた。プレゼン能力も鍛えられた。…社会のいろんな問題に興

味が高くなりました。ライターをしていて、一人で1頁書くのがノルマだが、私は3頁も書いている。中学時代、この学習を通して、文章を書くことが増えたので好きになったと気付いた。(卒業生 E)

このように、学習活動と指導方法においても、生徒の自律性や主体性を重視した展開を図っている。生徒主体といえども、課題設定、課題追究、発表などの学習活動の展開において教師のねらいを強くした意図的な指導方法をとっている。その根本的な発想は、「3年間でいかに生徒の生きる力を伸ばしていくか」であった。未来総合科の集大成である第3学年の「領域総合学習」においては「自分たちで学習するから、教師の指導はいらない」と生徒が言えるように学ぶ力を育成することをめざしてきたのである。

この未来総合科における探究的な学びが生き方や社会とつながったという例で、卒業生 F (S016) は「生きていくことは問題解決の連続である」と話した。卒業生の F, H, E はいずれも現在の仕事において未来総合科で身に付けた問題解決力を活かしていることを述べている。卒業生 H (S053) は限られた予算でいかに県民に理解してもらえる事業計画立案ができるかを仕事としていて、未来総合科「徳島独立計画」の学習過程を再構築している。まさに、そこで働く課題解決力が役立っていると述べた。卒業生 E (S078) はライターの仕事とは、課題解決過程を繰り返していくことであり、未来総合科の「領域総合学習」の徳島独立計画で委員会活動を行うにつれて、未来の徳島の課題が明らかになってきたことと似ている。今の徳島の課題を見付け、未来に向けてどう歩みだしていくことが大切なことかを考え、取材し、まとめ、表現し、明らかにしていく課題解決する力に助けられていると話した。

S016: …生きていくことは解決していくことの連続。中学生で社会との関わり方の能力が養われる。(卒業生 F)
 S053: …県の事業計画などの仕事を担っているが、限られた予算の中でやりくりしないといけないので、なんとかしたいと思ってなかなかできない状況がある。その条件の中で最大限に関わってくれている方々に満足してもらいたいと仕事をしている。未来総合科で学んだ課題解決能力が役立っている。(卒業生 H)
 S078: …(ライターが仕事で) 情報収集の取材先も一から探して、取材して、まとめるという流れが得意である。未来総合科で身に付けた課題解決能力が今の仕事にも、つながっている。(卒業生 E)

このような問題解決力が育った背景を元教員 L の証言は、「今の課題は何か、その課題を解決するためにはどのようにしたらよいか、どう考え、どう周りに伝え、どう提案していくとよいかを何度も振り返ることが未来総合科の学び」、「これまでにない学習活動」だと伝えている。開発当時も総合的な学習の時間が始まった当初も、「教育効果はすぐにはでないが、大人になった時に身に付けた課題解決力が発揮される」と学習価値がどこにあるかを同僚や人々にわかりやすく話してきたことを明らかにした。

3. 未来総合科の授業設計

(1) 話し合い活動の方法

① 話し合い活動の位置づけ

課題把握段階での話し合い、調査活動の準備段階での話し合い、情報交換のための話し合い、また自己の意見を確立し発表する場としての話し合いである。これらの話し合い活動は、国語科で培った基礎的な話し合う力を発揮する場であり、民主的な意識を持った社会人としての在り方を育成するために大切と考えている。

② 話し合い活動で学習観を転換する

身近な生活の中のさまざまな価値観の対立を題材にした、実践例「あってもいい違い、あってはならない違い」(第1学年基礎学習)では教師が用意したいくつかの課題をグループで検討し、話し合い、学年討論会へと進める。この学習過程において「こんな問題もあったのか」と生徒は気付き、考え始める。これまでの学習観の転換を図ることをねらった。

生徒は、課題把握の話し合い活動から自らの価値観を揺さぶられ続け、課題追究の話し合いにおいても自らの考える世界がどんどん広がっていく喜びを見出す。そのことが次の話し合いへの意欲の高さを維持し、未来総合科という教科への意欲につながることをねらった。ただ、話し合い活動に入る前に、必ず一人一人が考えを構築しておくことを忘れてはならない。自らの構築した考えが話し合いの過程を経るにしたがって、広がりや深まりをみせることが生徒にとって学ぶ楽しさや喜びになると構想した。

では、未来総合科の話し合い活動が卒業生にどのような成果をもたらしたのだろうか。卒業生 E (S015) は、未来総合科の自らの考えを構築して、話し合い活動に入る活動から身に付けた表現力がライターという職業につながっていることを話している。

S015：…未来総合科は答えがないことを考えていく中で、人と人が関わりながら課題解決をするためにやり取りを繰り返した。やり取りすることでコミュニケーション能力も養えた。情報を整理分析して、どのようにまとめて表現すると、聞いている人に伝わるかもよく考えた。プレゼン能力も鍛えられた。…社会のいろんな問題に興味が高くなりました。ライターをしていて、一人で1頁書くのがノルマだが、私は3頁も書いている。中学時代、この学習を通して、文章を書くことが多かったので好きになったと気付いた。(卒業生 E)

③話し合い活動に楽しさを見出す

話し合うことの楽しさの一つ一つの議論が根拠に基づいて説得力があり、論点がかみあいながら議論が展開していくことにある。実践例「世界に果たす日本の役割」(「領域別学習」の国際化領域)でディベート形式の話し合い活動を取り入れた。ディベートは、論理的な思考法、表現力、情報収集能力、整理分析力、考察力などまさに総合的な力が必要とされる話し合い活動である。人権意識の情操を大切に、ディベート特有の相手を打ち負かす論破に力点をおくのではなく、確かな論拠で考えを述べることを生徒に伝え、協同して論を展開していくことの醍醐味を伝えようと心掛けた。

話し合うことの楽しさを味わった卒業生 D (S014) は、論理的な思考法、表現力、情報収集能力、整理分析力、考察力などまさに総合的な力を用いて医療の仕事に携わっている。決まった答えがない医療現場の解を求めるときに、どのような医療を施すことが患者にとって最適なものを未来総合科で身に付けたと述べた。

S014：…課題解決するために、人と話し合うことを通して自分の意見が言えるようになってくる。医療に携わって、患者一人一人で正解が違うと思っている。医療には決まった答えがないので、権威のある先生が薦める治療法に対し、患者を診ている主治医が患者側に立った考えが述べられるかどうかで患者の運命は決まってくると思う。未来総合科で学んだ自分の考えを述べる力が役立っている。(卒業生 D)

④話し合い活動を自らの考えを発表する「ハレの場」にする

実践例「徳島の未来について考えよう - 徳島未来戦略 -」(第3学年「領域総合学習」)は、まとめ段階で委員会審議、政党内討議、議会(「徳島の未来について考えよう - 徳島独立計画 -」模擬県議会)の3つの話し合い活動で、それまでのフィードバックや公聴会などを通して得た情報を整理し、それぞれが考え出した政策案を発表する。いろいろな体験や調査活動を通して、総合的にまとめ上げた自らの政策を熱心に聞いてくれる仲間がいるところで発表できる喜び、自ら考えを発表し異なる視点からの考えを取り入れて深まり広がっていく喜び、すべての生徒が自らの考えをさまざまな調査活動や話し合い活動を経て、一つの政策へと結実する過程こそ、未来総合科のめざす汎用的な能力の育成を生み出す過程と考えていた。

卒業生 I (S009) や E (S015), F (S016) は、答えがないものを探究するには人とかかわるコミュニケーション力が欠かせない。自らが社会と関わって人と課題を共有し、よりよい課題解決を見出そうとするとき、コミュニケーション力も養えると話している。

S009：…答えがないものを手探りで探していくのは、最初、すごく難しかったなっていうイメージがある。…答えを探していくことや、友達と話し合っていく力が社会に出たときに役立っている。(卒業生 I)
 S015：…未来総合科は答えがないことを考えていく中で、人と人が関わりながら課題解決をするためにやり取りを繰り返した。やり取りすることでコミュニケーション能力も養えた。情報を整理分析して、どのようにまとめて表現すると、聞いている人に伝わるかもよく考えた。プレゼン能力も鍛えられた。(卒業生 E)
 S016：…今まで知らなかったことを調べていく過程で、自分から主体的に社会とかかわっていく能力が養われていく。なぜなら自分が社会と関わって考えていかないと課題解決ができない。(卒業生 F)

(2)全体発表の形態

①多様な発表の場を設定する

提案型、未来志向型の実践を重ねていくとき、学習の成果をまとめ・発表する場の工夫がある。生徒が探究のプロセスにおいて情報収集、整理・分析したことをレポートやプレゼンシートにまとめ・発表提案する形態だけでなく、ディベートを取り入れて互いが討論し、自らの考えを提言するなど工夫したさまざまな形態が必要であると考えた。学習の成果を共有するためには、発表の場を設定しなくてはならない。なぜならば、自己実現できる「ハレの場」があるからこそ、生徒の学習意欲は高まるからである。

また、ここで最も大切にされたのは、総括的なまとめ・発表の段階だけに学習成果発表を位置付けるのではな

いということであった。探究のプロセスが何度も何度も繰り返されることで生徒の学びが広がり深まると考えられる。そこで、学習過程において中間発表を設定することにより、課題追究の情報収集の方法や調査結果が共有される。新たな課題設定をし、探究のプロセスを繰り返すことができ、次への学習のステップを踏み出すことができると考えたからである。

②発表の場の形態と方法

A) 討論会

1 学年 1 学期の基礎学習で、学級から学年へと規模を拡大しながら学級の枠を外した学級対抗討論会の場の設定をした。身近な生活の中に「あってもいい違い」「あってはならない違い」を考え、討論した。情報収集したことを根拠に論じ、さまざまな価値が対立する場面に気付かせ、学習観の転換を図ることが目的だった。学習効果は、次の 3 つと考えた。

- ・課題に対して多面的にアプローチすることができる。
- ・情報活用能力、論理的思考力、表現力を総合的に育成することができる。
- ・生徒は積極的に発言したり、自らすすんで調べたりしようとする。また、総合的な見方・考え方をせざるを得ない状況を作り出すことにより、情報の収集、情報の活用、表現活動（書く、話す）審査などの評価活動など、総合的な活動ができる。

このように、討論会をさまざまな場面で設定することで、一人一人が主役となって学習に取り組み、個々の生徒の個性伸長もできると考えた。

B) 学年提案発表会

領域総合学習の最後の時間に学年全体で行うものとした。課題別編成チームで発表会をもった後、学年全体で提案発表会を催し、提案に質問し、コメンテーターに意見をいただくことにより、この学習が社会に生きて働くものだと充実感を得られると考えた。

C) 模擬県議会

領域総合学習の最後に、学年全体で行うものとした。学年提案発表会の提案がより総合的なものにしようと考えた。A と B の提案がそれぞれでは納得できるものであっても、A と B の提案を同時にした場合には矛盾が生じるような問題、C の領域の問題に関して A、B の提案を同時に実施しようとしたら矛盾が生じるような問題、あるいは、C の領域の問題を解決しようとするれば D の領域の問題に言及せざるを得ないような問題、を考え提案させることにした。

例えば、「徳島の未来について考えよう - 徳島独立計画 -」という課題では、各政党で立案した政策をもとに、学年全体で議論や審議をしながら決定していく場がこの「模擬県議会」である。審議にあたっては「与党」の立場をとる政党の政策をもとに、話し合いを進めていくことにした。模擬県議会を設定したのは、議会のしくみを学習するためではない。模擬県議会という場を設定し、政策を戦わせる中で、総合的なものの見方や考え方を学習し、身につけていくことをねらいと考えたからである。

卒業生 E (S015, S078) は、身の回りの出来事から社会問題に至る、社会で起こる様々な問題意識が高くなったことが自らの職業への意識につながったことや就職後の仕事の役割で課題発見と課題解決が求められてきたことを証言している。

S015：…人と人が関わりあうような学習活動の中でコミュニケーション能力は養えた。…社会のいろんな問題に興味が高くなりました。ライターをしていて、一人で 1 頁書くのがノルマだが、私は 3 頁も書いている。中学時代、この学習を通して、文章を書くことが多かったのが好きになったと気付いた。(卒業生 E)
 S078：取材先も一から探して、取材してまとめるが得意というか好き。今の仕事にもつながっている。(卒業生 E)

4. 平成 8 年度の 3 年生に対する学習効果に関する調査

平成 8 年度の 3 年生を対象に、「領域総合学習 3」が終了した平成 8 年 12 月に実施した調査結果の一部から、この教科に対する生徒の当時の意識を見ることができる。いずれの項目も「はい」「はいに近い」「どちらともいえない」「いいえに近い」「いいえ」の 5 肢選択で回答させている。「この学習は自分とは関係のあるものだったと思いますか」については、「はい」と「はいに近い」の合計が 72.1%であり、「この学習は、自分にとって価値があったと思いますか」については「はい」と「はいに近い」の合計が 84.2%である。未来総合科で学んだことが自分の将来や生き方に関わる、自分にとって価値があったとらえている生徒が多いことが分かる。それに対

して、「将来、徳島に何らかの形で貢献したいと思いますか」については「はい」と「はいに近い」の合計が58.9%である。3年「領域総合学習」では徳島をテーマに学習を展開したが、そのことが必ずしも徳島への貢献意識にはつながっていない生徒が少なくない。だが、未来総合科での学習経験やそこで培われた資質・能力に価値を感じているとは考えられる。ゆえに、いわゆる「自分探しの旅」への糸口として効果のある学習と捉えていることには違いない。

VII. 鳴門教育大学学校教育学部附属中学校「未来総合科」の課題

卒業生は未来総合科に対する課題についても語っている。大きく以下の3点にまとめることができる。いずれも現行の総合的な学習の時間にもつながることである。

(1)小中高の連続性

- S007：小学生の時に生活科を経験した。そのよい印象が残っていて、中学校で同じような未来総合科があり、すごく嬉しかった。(卒業生 G)
- S105：生活科で凧を自分で設計して、作って凧揚げをするというのを2年連続行った。最初の年は失敗で次の年はその反省に立って成功した。小さな成功体験だったが、それがきっかけで、理科が好きになった。だから今、科学分野の研究に携わるようになった。生活科と総合の力を知ったから、小中高とトータルであれば、もっと広げられる。(卒業生 G)
- S012：小学校から高校まで一貫した形であると、もっと社会、大学になってもより強い意識を持つていける。(卒業生 A)
- S013：…答えがないものをみんなで話し合っ、未来志向で物事を考えていこうとする学習活動である。このような学習活動を継続的に小中高でやれば、子どもに問題解決する力も身に付くのではないか。(卒業生 C)
- S108：私は未来総合科が好きで、…この教科は一から頑張ったと思う。卒業して、高校では総合科というのがなかったので、もう途切れてしまって、それが大学選びにつながらなかったのが残念だ。(卒業生 E)
- S113：…中学で終わるのはもったいない。非常に充実していることをやっているのを継続してやってもらいたい。先生のなかにも温度差があると思う。生徒の活動に対して介入する部分、サポートする部分をもっとあってもいい。(卒業生 A)

卒業生 G (S007) は生活科との関連を語った。出身小学校が生活科の研究指定校である。生活科を経験した時のよい印象が残っていて、同様の学習である未来総合科による印象を持ったと述べている。また、生活科での成功体験が理科への興味へとつながり、今の研究職の道へとつながったと述べている (S105)。彼らは中学校の3年間は研究開発学校だったために総合的な学習を体験したが、小学校及び高等学校ではこのような学習を受けていない。卒業生 G (S105) や A (S012), C (S013) は総合的な学習を小学校から高等学校まで継続的に行うことの価値や重要性を述べている。

確かに、現行学習指導要領においては、小中高と時数は異なるが総合的な学習の時間として存在している。学校を取り巻く地域や児童生徒の実態や特性を踏まえたカリキュラムづくりが学校の独自性を強くしたものとなっている。熱心に取り組んでいる地域や学校においては系統的、計画的な小中高の連携も見られる。学習内容や学習方法を小学校から中学校へ、そして高等学校へとつなげていくことで生徒の学びも広がりや深まりが期待でき、より高次な思考を伴う汎用的能力が身に付くと期待される。

(2)テーマ設定の工夫

- S019：テーマの徳島独立計画については、子どもたちが活発に発言するテーマになったのかな。身近なテーマでなくて、発言できない子もいたんじゃないかな。コミュニケーション能力をアップさせたり、自分の意見を発言する機会にしたりするのであれば、身近なテーマでないと、発言できない子どももいると思うので、もう少し面白いテーマの方がよいのではないかと思った。(卒業生 I)
- S021：最近、徳島の番組で、未来総合科のようなことやりましたというようなニュースを何回か観たことある。地域の防災マップや津波、地域の商売に反映させるかということを観た。附属だと徳島県全体となるが、地域の学校だと地域の子も子どもたちが集まっているので地域密着型というようなことをやっていくことになる。(卒業生 B)

卒業生 I (S019) は「徳島独立計画」といテーマ設定に言及している。生徒のコミュニケーション力育成を考えるのならば、もっと身近な問題の方がよかったのではと述べている。また、卒業生 B (S021) は、「徳島独立計画」という大きなテーマを掲げたことについては広範囲の地域から通学している附属中の実態を踏まえた上で、地域にある公立学校ではもっと地域に密着したテーマ設定が望ましいと述べている。

テーマ設定は大切である。これで生徒の学びの広がりや深まりが決まってしまう。知識理解にとどまらず、物事を総合的に考え判断をせざるを得ない問題や自らの生活の便利さと比較して課題解決しなければならないような課題設定が望ましい。

(3) 評価の充実・システム化

S095：総合学習と今の大学入試とが連続性がないような気がして、総合学習を頑張った子が、ある程度の大学に入れるようにつくっていかんといかん。(卒業生 H)
 S100：僕は適当にやっていたと思う。たぶん評価されないってのがわかっていたと思う。(中略) 評価するシステムはあった方がよい。(卒業生 D)
 S109：プロセスは大事だが、どんな評価したらよいかということだと思う。…評価のポイントみたいなものを作っていないといけないと思う。難しいですね。点数化するの難しい。(卒業生 D)

時々刻々と変化する世界や社会情勢を生きる生徒に求められるのは汎用的能力と言われている。社会と関わりながら汎用的能力を發揮していくことが求められている。汎用的能力の基礎は思考力である。社会で生きて働く力を学校教育で育成していくことができなければ、かつて経済大国と言われた日本は世界から取り残されていくだろう。「見えにくいから見ない。測りにくいから測らない」ではなく、測りにくいからこそ測られるようにシステム化を進める必要がある。総合的な学習の時間で育成された思考力を評価することは決して簡単なことではないが、簡便な方法をシステム化していかねばならない。

VIII. まとめと課題

VIの4.の当時の3年生に対する学習効果の調査で「この学習は自分とは関係のあるものだったと思いますか」の肯定が72.1%で「この学習は自分にとって価値があったと思いますか」の肯定が84.2%となっている。本調査研究の結果、卒業後18年の人生においても、学習価値が認められている。むしろ学習直後よりも18年間の社会生活を送ってきた今の方が身に染みて学習価値や効果を実感していると考えられる。

このように、未来総合科の学びで身に付けた汎用的能力の価値について明らかになりつつある。

(1) 問題解決力

未来総合科の学習活動の特徴をみると、国際化・情報化・環境・社会福祉の問題について考える教科をめざしたことがわかる。実社会や実生活における課題を生徒自らが設定する。課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現の探究のプロセスを経る。課題を解決するためにどのように情報の収集をしたらよいか、情報の整理・分析はどうするか、どう工夫してまとめて表現したらよいか考える。課題発見から課題を解決する能力までが求められた学びだったことが証言や関連資料に表れている。

なぜ、それまでになかった学習活動を開発したのか。それでは、21世紀の社会に求められる能力はどのようなものか考えたい。じっくり考え、何が適切かを判断する思考を伴う能力や人と話し合ったり、情報交換したりして新しいアイデアを生み出したり、より多くの人との関わりを大切にしたりする力が求められるようである。一人の力で解決するのではなく、より多くの人と関わることで、複雑な手続きを要する仕事や高次の思考力が高められ、これまでに生み出すことができなかったものを開発する仕事など人間でなければできないものが求められるようである。

そこで、授業の指導法の変化が求められる。生徒が主体的に学ぶ探究的な学習活動が展開される授業を具現することが必要になる。単に知識を暗記し再生していればよいのではない。一斉画一的な受身の授業ではかろうじて知識を伝授することはできても21世紀に求められる能力を育成することはできない。受身で後ろ向きな、社会で役立つ能力を育成することになりかねない。未来総合科は18年前に開発された21世紀の社会を見据えた、まさに未来志向型の教科であった。

(2) 対人関係形成力・協調性・コミュニケーション力

なぜ、人と関わる学習を数多く仕組んだのか。人は社会とつながって生きている。誰かと関わって社会生活を送っている。社会生活で課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現の探究のプロセスは人と関わりながら経ていく。たった一人で探究のプロセスを実現しようとしても難しい。むしろ、より多くの友達や地域の人々などと関わりながら考えを広げたり深めたり確立させていくことで、よりよい考えやアイデアが生まれ、質の高い仕事が提案できるに違いない。

私たちは研究開発メンバーとして、21世紀を生きる生徒に学び合うことでよりよい課題解決ができることを伝

えたかった。より多くの人と関わり課題解決をすることが質の高い探究的な学びにつながる。そこで、より多くの人と学ぶ喜びや質の高さを実感したとき、学ぶことのおもしろさが味わえる。そして、この学びのおもしろさは次への生きる力となる。

(3)自主性・主体性

なぜ、自律性や主体性を身に付けようとしたのか。新しい時代を生きる生徒には生きる力の一つである自律性や主体性が大切と考えていたからである。未来総合科を新教科として設置したねらいや目標をみると、自らの意思を決定していく能力の育成や自ら学習していく能力や態度の育成の具現化をめざしたことがわかる。その当時、附属中内では「従来の教科指導法であった知識伝達型の指導ではない。『教師は生徒とともに学んでいく』といった新しい指導観に立たなければならない」ということが常に語られていた。当時、文部省の教科調査官、本学の研究者とともに議論する専門部会や研修で何度も話題に上った。教師の指導姿勢が鍵だった。教師主導ではいけない。しかし、生徒を放ってはいけない。この教師の指導姿勢を元教員Lは「後押し役ファシリテータ」と表す。「生徒とともに学ぶ。学び方を教える。教師は学びのプロでなければならない。未来に起こる数々の社会問題は人々の予想を超えることが数限りない。生きることは課題解決していくことではないか。社会と関わり、自分の力で課題解決していかなければならない。教育の目的は生きる力を生徒に身に付けることに違いない。多くの知識を詰め込ませることで生きる力は身に付かない」という学習観・教育観が共有化されていた。

(4)様々な社会問題への興味・関心、社会とのつながり

なぜ、社会問題を考えさせようとしたのか。未来を予想し、21世紀を場面設定する学びは生徒にとって魅力ある時間である。未来を生きる生徒にとって、どのような社会が自らを待ち受けているのか、幸せな社会生活を送るためにはどうしたらよいのかなど考えるだけでワクワクする時間であると予測された。だが、21世紀は当時の社会よりもさらに複雑に社会問題が絡んでくることが想定された。人は社会とつながり生きている。未来はどのような社会か。21世紀の社会で生き抜く力を付けたいと考えた。

それゆえ、国際化・情報化・環境・社会福祉の問題について考える教科として、4つの領域別学習でそれぞれの問題について、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現の探究のプロセスをチームで人と関わりながら解決する学習方法に取り組みさせた。また、未来に心をはせ、未来志向で物事を考えることや時代を先読みすることを期待して学習内容を提案した。

(5)職業意識

なぜ、職業意識が身に付いたのか。これまでのカリキュラム評価で理解されていると思うが、職業選びの調査活動や社会貢献の仕方を学習活動で取り上げたのではない。むしろ、21世紀の社会問題をどのようにして課題解決していけばよいのか。人とどのように関わって社会生活を送ればよいのか。課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現の探究のプロセスを3年間で何度も繰り返していく中で、さまざまな話し合い活動を行い、よりよい課題解決の方法を見出そうとしてきた。その探究のプロセスを何度も繰り返した生徒は、実際の社会生活においても自ら課題解決する能力が備わっていると考えられる。社会と関わりながら、自らの特性を見付け、社会貢献に繋がる職を得て、日々探究のプロセスを繰り返してきたのであろう。例えば、卒業生Cは中間管理職として、自らの力で課題解決力を養うことを目的に自律した部下を育てようとしていることは先述したが、質の高い仕事を提案する21世紀の職業人にはなくてはならないものである。

(6)課題

未来総合科の根本的な発想は「3年間でいかに生徒の生きる力を伸ばしていくか」である。本調査で未来総合科の学びを振り返らせたと、指導者が構想したことが卒業後の18年間に大きな影響を与えていることは聞き取り調査をして明らかとなったが、さらに卒業生個人を限定した18年間の姿からより具体的な場面を焦点化することで、総合的な学習の教育効果と考えられる汎用的能力育成への手がかりを明らかにしていきたい。

謝 辞

本調査研究を進めるにあたり、鳴門教育大学附属中学校の卒業生9名と元教員5名の方々が快く聞き取り調査に参加して下さった。ご協力いただいたおかげで18年経った未来総合科の教育効果としてまとめることができた。この場を借りて改めて14名の方々にお礼申し上げたい。

[引用・参考文献]

- 1) 村川雅弘, これまでの“資質・能力”を考える, 教職研修, 第497号, 2014年1月号, pp. 22-25
- 2) 文部科学省・国立教育政策研究所, 平成25年度全国学力・学習状況調査報告書クロス集計, 2013年, p. 21
- 3) 文部科学省・国立教育政策研究所, 平成25年度全国学力・学習状況調査報告書クロス集計, 2013年, p. 58
- 4) 村川雅弘ほか編著, 『「カリマネ」で学校はここまで変わる!』, ぎょうせい, 2013年, pp. 71-83
- 5) 中西茂, 総合学習の再評価という視点, 生徒指導, 2014年6月号, pp. 60-61
- 6) 朝日新聞, 社説 全国学力調査 順位より分析に目を, 2014年8月27日
- 7) 毎日新聞, 社説 「底上げ」を生かすには, 2014年8月26日
- 8) 村川雅弘, 学校を基盤としたカリキュラム開発の現状と課題 (I), 鳴門教育大学研究紀要 (教育科学編), 第2巻, 1987年, pp. 16-29
- 9) 赤澤敏樹, 総合的な学習における教育効果-子ども・教師・保護者の調査をもとに-, 鳴門教育大学大学院平成12年度修士論文, 2001年
- 10) 田中博之監修・ベネッセ教育総研編, 21世紀型学力を育む総合的な学習を創る, ベネッセコーポレーション, 2002年
- 11) 村川雅弘, 子どもたちのプロジェクト S, NHK 出版, 2002年
- 12) 滋賀大学附属中学校, 総合学習「BIWAKO TIME」の学習効果検証 検証: 総合学習の是非を問う-総合的な学習の時間は本当に必要なのか? -, 2006年
- 13) 佐野亮子, 総合的な学習の時間に関わる先行的実践の検討, せいかつか&そうごう: 日本生活科・総合的学習教育学会誌, 8号, 日本生活科・総合的学習教育学会, 2001年
- 14) 五十嵐健, 総合的な学習における学力形成と生き方に与える影響の検証-卒業後の追跡調査による体験者の語りを中心に-, 鳴門教育大学大学院平成19年度修士論文, 2008年
- 15) 鳴門教育大学学校教育学部附属中学校, 未来総合科で生きる力を育む, 明治図書, 1997年
- 16) 前掲書15), pp. 45-46
- 17) 前掲書15), p. 47
- 18) 前掲書15), pp. 48-49

A Follow-up Survey regarding the Educational Effects of *Integrated Studies* : Based on Interviews with the Former Students and Teachers of “Mirai Sougou-ka” (Integrated Studies for the Future) at the Naruto University of Education Attached Lower Secondary School

MURAKAWA Masahiro* and KAMADA Akemi**

(Keywords : Integrated studies, educational effects, follow-up survey)

The Naruto University of Education attached lower secondary school undertook research and development on a new subject “Mirai Sougou-ka” (Integrated Studies for the Future) for 4 years from 1994 as a pilot study commissioned by the Ministry of Education. Some twenty years have passed since the project; the students at that time are now in their thirties and have been active members in the society. The purpose of this study is to report how taking the subject has influenced or affected them, or how the teachings have been useful in their daily lives and on the job since then, as is revealed by interviewing some of the former students (9 people) and some of the former teachers (5 people).

First, the quality/ability the most students noted is the one relevant to problem discovery and solution. The new subject is designed to have students think about problems in international understanding, information, environment and welfare. The students each take up some problem relevant to the society and/or their lives. Specifically, they undergo the inquiry process of finding problems, collecting, organizing and analyzing the relevant information, expressing their findings, and finally solving the problems. The former students said that the series of the learning activities had prepared them for dealing with various problem-solution scenes in their later lives.

Secondly, they pointed out the quality/ability relevant to building relations with other people, cooperativeness, and communication skills. They think that because of their experience of expanding, deepening and constructing their ideas by successfully managing relationships with friends and people in the community in the classes, they can now work collaboratively with their colleagues at work, which leads to coming up with quality ideas and proposals and leading fulfilling professional lives.

Thirdly, they referred to autonomy and independence. One of the subject’s goals is to cultivate the ability and attitude to make decisions and learn on one’s own. We think that the students understood very well, the new teaching philosophy underlying the subject—“Teachers learn along with students”.

*Advanced Educational Practitioner Course, Graduate School, Naruto University of Education

**Tokushima Prefectural Tomioka-Higasi Junior-High/High School